九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

境忠一著『近世詩と反近代』

赤塚，正幸
九州大学大学院修士課程

https://doi.org/10.15017/12122

出版情報：語文研究. 41, pp.47-49, 1976-03-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

境忠一著『近代詩と反近代』

赤塚正幸

この欄は、「書評」ではなく「紹介」であるから、批評めいたことを記してはならないとのことである。それで、紹介をしようと思うが、境先生御自身による本書の「あとがき」に、実はこの本の紹介は、簡潔にして適切に記されてある。それ以上の「紹介」もないと思うので、「あとがき」を引用しつつ本書の内容についてみたい。

本書は境先生第四番目の論文集である。『評伝宮沢賢治』『詩と故郷』『詩と土着』に続くものであるが、「前著『詩と土着』の延長の上にあり、いわば、その続篇といってよい」ものである。そして、「表題が示しているように、最初からテーマは一貫しているのだが、少しづつ視座を変えてきている」という視座の変化とは、本書においては詩史的観点を強く意識しているということであろう。

構成としては内容を三つに分け、「Ⅰを一般論、Ⅱを作家論に当てているが、Ⅲは資料として、新聞や講演原稿などを入れた」となっている。

まずⅠについてであるが、巻頭論文として『詩と土着』からの再録になる「近代詩の源流」を掲げてある。これは「近代詩」と「反近代」という詩史的側面を打ち出すに当たって、まず冒頭に置かるべきものであった。それは、同論文中の「『新体詩抄』にはじまった近代主義の思想化が、自由民権運動の挫折と北村透谷の自裁によって空洞化されたところに、近代詩の陥穽があった。自由民権歌の観念性は、大正デモクラシー時代の民衆派の観念性につながり、さらにそれは大正末期から昭和初期のプロレタリア詩、戦後の民主主義文学という系譜に、思想の不毛性を生んでいる。それは民主主義文学系の不毛性というより、近代詩の思想的な不毛性となって、現代詩にもあらわれている」という、近代詩に対する基本的認識の表明である。以後この線に即して本書は進められるが、「近代詩の問題一つとっても、藤村から近代詩ははじまるという通説あるいは俗説が、いかに透谷・藤村を見誤らせるものであるかを知らしめるだけでなく、近代詩全体の方向付けを誤らせたかを語っている。透谷と藤村の位置付けは、再検討を必要とするだけではなく、極端にいえば、逆転をする必要さえある」のではないかという疑

問に始まる「北村透谷と島崎藤村」において、藤村以後の近代抒情詩が、いかに思想の不毛性を拡大する方向にその完成がなされたかについて論証された後、「近代詩のはじまりは、まさしく、藤村よりも透谷によるばかりでなく、『楚囚之詩』『蓬莱曲』で透谷が追究した「自我」の問題は、今日でも解決されていないといえるのだ」と結論づけられている点は、数冊の詩集を発行して詩人としても活躍しておられる境先生の、不毛な近、現代詩に報いようとする一矢ということができよう。

Ⅰには他に「辻潤のニヒリズム」「『氷島』と戦後詩」「戦後詩と伝統」「現代詩の論理」というように、近代詩の始まりから戦後までを覆う論文が収録されている。

Ⅱでは、「宮崎湖処子と三奈木」「北原白秋と伊東静雄」「中原中也と故郷」「安西均と筑紫」「谷川雁と故郷」「松永伍一と高橋睦郎」の六篇であり、ここでは先の観点に立った上で、詩人（詩）と故郷という、先生の一貫して変わらぬテーマが追求されている。そのうち「北原白秋と伊東静雄」は「ふたりはなぜ転向したかという疑問」という副題を持っている。このふたりの転向を同時に論ずることは一見奇異に思われるかも知れない。著者自身も「このふたりの詩人のたどった道は、全く交叉することなく終っているようにみえる」と述べておられるが、昭和十年代という時代をともにした両者を比較することによって、当時の詩及び詩人たちの特質といったものを把えようというのである。白秋は、「汎神論的な自然観から出発して積極的に汎神論的国家観へはいって」いき、「言霊信奉を楯にすることで、国民詩人の座についた」のだが、静雄は、第二次世界大戦という背景の下で、「自己を卑小化し、庶民のひとりに加えることによって、運命に殉じ」ようとしたのであり、そこに「身辺のものにしか真実を認めないという眼の厳しさ」が感じられるのである。そのような二人の転向は、「初期の自我主張が自然との調和へ還ることによって、国家体制と合一化する過程において、北原白秋と伊東静雄は必ずしも同一ではないにしても、相似の関係を持っているように見える。出発点において、時代的にも詩史的にもはるかにへだたっていた両者の伝統回帰を同一視することは危険だが、巨視的にみれば、はじめに〈業〉ということばで呼んだ〈日本回帰〉の亡霊が、この両者につきまとっているのを感じないわけにはゆかない」というものであった。そこから、問題提起の形で最初に述べられた「日本の近代詩が背負わねばならなかった業のようなものを、ふたりともかかえこんだまま終っているところがあるのではなかろうか」という結論に至ることになる。

このように、境先生の御研究は、従来の詩と故郷、あるいは土着といったテーマに詩史的な観点が加わったことで、更なる深化と発展とを達成したといえよう。『近代詩と反近代』一冊は、まさにそのような書物である。

最後に、Ⅲについて少し述べておくと、あるいはここに本書の特長があると言えるかも知れない。「あとがき」に記されてあるように、新聞原稿や講演などが収録されているにしても、それは「単に啓蒙として書いたものではない。要望によって書いたものだが、自己の問題意識を鮮明にし、何らかの形でそれを他者に呼びかける意図を持って書いたといえる」ものなので

ある。表面的には気楽に読めるものではあっても、それは親しみやすいという境先生の御人柄そのままなのであるが、こちらの熱意次第では奥に確かな手応えを持っているといえよう。

綿密な実証に裏付けられながらも、実証的論文が往々にして陥りがちな退屈さから脱却しているのは、先生の手腕を示すものであり、前三著と違って選書タイプの造本としたこととともに親しみ易い本になっている所以であろう。

（『近代詩と反近代』昭和五十年三月・葦書房発行一七〇〇円）

受贈雑誌（昭和五十年四月～十一月）①

愛知県立大学文学部論集25／青山語文1 2 3 4 5／跡見学園国語科紀要23／演劇学（早大演劇学会）16／大阪樟蔭女子大学論集12／大阪府立大学紀要22同目録（1～22）／大谷女子大国文5／大妻国文6／岡大国文論稿3／沖縄国際大学文学部紀要3巻2／音声学会会報148／会報（大学基準協会）28／学園論集26／学芸国語国文学3 4 11／学大国文（大阪学芸大）18／香椎潟20 21／学習院大学文学部研究年報21／金沢大学教養部論集12／金沢大学法文学部論集22／金沢大学語学文学研究6／金沢文庫研究21巻2 3 4 5 6 7 10／北九州大学文学部紀要12／岐阜大学研究報告23／岐阜大学国語国文学11／九州文化史研究所紀要20／金城学院大学論集60